

I. 導入

おはようございます。ヨハネ10:27で、イエスはこう言われます。
「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。」私たちは主の声を聞き分け、それに従いたいものです。イエスが私たちの主であり、愛と恵みによって導いてくださるお方だからです。しかし、主の御声がそれほどはっきり聞こえないように思えるときがあります。今日は、主がパウロの働きを導かれた様子から、私たちの生活でもさらに主の御声をはっきり聞き分けられるよう学びましょう。まず、**使徒16:6-15**を読みましょう。



II. 聖書朗読 (使徒16:6-15, 新共同訳)

16:6 さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。16:7 ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。16:8 それで、ミシア地方を通ってトロアスに下った。16:9 その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願った。

16:10 パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。16:11 わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、16:12 そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。16:13 安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。

16:14 ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話に注意深く聞いた。16:15 そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。

III. 教え

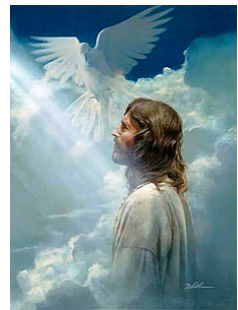
先週見たように、パウロとバルナバはマルコと呼ばれるヨハネを連れていくかどうかで対立し、別行動することになりました。その結果、ひとつではなくふたつの宣教チームが形成され、アンティオキアか



ら送り出されました。バルナバとマルコはキプロス島に渡り、現地の信徒たちを訪ねました。一方、パウロとシラスはシリア州やキリキア州を旅し、教会を力づけました。その後、デルベとリストラに行きました。

リストラで、パウロはテモテに宣教の旅に加わるよう誘いました。こうして、パウロとシラス、そしてテモテが旅をつづけ、トロアスに到着しました。その途上、聖霊によって少なくとも二度、行程を変更させられました。初めは**使徒16:6**です。そこにはこうあります。「さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通過して行った。」ここでアジア州と書かれているのは、ローマ帝国内のアジア州、現在のトルコ南西部にあたる場所です。アジア州で御言葉を語るのを聖霊がどのようにして禁じたか詳細はわかりません。預言の言葉だったのか、止められているように強く感じたのでしょうか。いずれにせよ、アジア州で御言葉を語るのにふさわしい時ではないことを、聖霊ははっきりと知らされました。こういうわけで、一行は旅を続けました。

使徒16:7「ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。」この箇所は興味深い一節です。ここで、聖霊はイエスの霊と呼ばれています。ここで思うのは、創造主なる神は、聖書の中に三位一体としてあらわれるということです。それは、父、御子、聖霊という三位格にあらわれるひとりの神です。主の霊とかイエスの霊と言っても、同じ神の聖霊であることに変わりありません。パウロの宣教チームがアジア州へ南下しようとする、聖霊がそれを禁じました。次にビティニア州へと北上しようとする、再び聖霊がそれを許されませんでした。一行は東から旅してきたので、残された方角、つまり西へと旅を続け、トロアスにたどり着きました。



トロアスで、パウロは非常に具体的な召しを受けます。**使徒16:9**「その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、『マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください』と言ってパウロに願った。」ローマ帝国の領地マケドニア州は、現在のギリシャ北部、トロアスとエーゲ海をはさんで対岸に位置します。なぜ聖霊は、この幻を見させるために、わざわざパウロとその一行をトロアスに連れて来られたのでしょうか。はっきりとはわかりませんが、次の一節に小さな手がかりがあります。

使徒16:10「パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。」ここで、パウロの宣教チームを指す言葉として初めて「わたしたち」という単語が使われています。これは、使徒言行録の著者であるルカが、パウロとトロアスで会い、一行に合流したことを示します。ルカは慎ましい人で、この話に自分の名前を一度も登場させません。けれども、この時点からパウロの一行が「わたしたち」と呼ばれていることから、ルカがその一員だったことがわかります。聖霊は、パウロが北にも南にも行くことを許さず、西へと導かれ、トロアスに連れて行かれました。ルカがちょうどそこにいて一行に合流することができるためです。

パウロと一行は、船でギリシャに渡り、マケドニア州の主要都市フィリピへと陸路を進みました。パウロの書簡、フィリピの信徒への手紙のおかげで、フィリピは私たちにも馴染みのある町の名です。これは、保存状態の良い遺跡の写真です。紀元前4世紀から紀元4世紀ごろまで使われていた劇場跡です。パウロがフィリピを訪れたころ、ここは発展都市でした。



使徒16:13 「安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。」パウロたち一行は、この数日前に町に到着し、その間に祈りの場所のことを聞いたのででしょう。この町にはユダヤ人があまりおらず、会堂がなかったため、川岸に祈りの場所のみがあったのだと思われます。この日は、婦人たちのみが来ていました。当時のユダヤ人説教者たちの多くは、おそらく女性の集まりに関心を示さなかったでしょうが、パウロの一行は婦人たちと座って、イエスのことを話しました。

使徒16:14 「ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。」リディアはユダヤ人ではありませんでしたが、神を礼拝する人でした。神はパウロを用いて福音を伝えましたが、彼女の心を開いて信じるようになされたのは神ご自身です。リディアは商売人でした。紫布、または紫色の染料を売っていました。ローマ帝国時代、紫の染料はシリアツブリガイの排泄物から取られていました。布一枚染めるにも何千何万という貝が必要になりますし、たいへんな労力のかかる工程でした。こういうわけで、紫は非常に高価で、高貴な人物のみが身に着けられるものでした。紫布の商人は、ずいぶん裕福だったでしょう。お金持ちが信仰に入るのは難しいといわれますが、リディアはパウロの話を一度聞いただけで、イエスを信じようと固く決心したようです。



リディアは、知られている限りヨーロッパ大陸初のクリスチャン改宗者です。彼女は正教会でたいへんな栄誉を受けており、「使徒と並ぶ人」と呼ばれています。フィリピでは、彼女の名前のついた教会が今もあります。フィリピの教会が始まった当初からその後も、リディアが教会の有力者だっただろうと考えられます。

この教会の内部には、パウロとリディアが並んで描かれています。リディアの夫については記載はありませんが、やもめだったのだろうと多くの学者が言います。いずれにせよ、彼女は家長だったようです。リディアが信仰を持つと、家族もそろって洗礼を受けました。彼女は気前よく宣教チームを家に招き、フィリピにいる間の宿泊を提供しました。**使徒16:15** 「そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、『私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください』と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。」



パウロはフィリピに来て、川岸に集っている婦人たちに福音を伝えました。これは、ガンギテス川の写真です。伝承によると、ここでパウロとリディアは出会ったといいます。このすぐ近くに、川と直結した洗礼場があります。リディアと家族がこの近くで洗礼を受けたということで、現代の多くの人がそこを自らの洗礼の場所として選んでいます。



イエス・キリストを主であり救い主であるという信仰で家族が一致するのは素晴らしいことです。この写真は、家族がイエス・キリストとともに喜んでる様子をあらわしています。私たちもリディアのように勇気をもって家族にイエスの福音を伝えることができるようにと祈ります。今後、多くの家族が私たちの教会に加えられますように。



ここで少し戻って、主がパウロ一行の旅を一步一步導いて来られたことを考えたいと思います。まず、第二次宣教旅行は、使徒15:36から始まりました。そこにはこうあります。「数日後、パウロはバルナバに言った。『さあ、前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し、どのようにしているかを見て来ようではないか。』」なぜパウロは二度目の旅を提案したのでしょうか。一度目の旅は、主の特別な導きを教会が受けたことから始まりました。けれども、第二次宣教旅行の前にそのような特別な導きが主からあったようなニュアンスはありません。

パウロは、聖書の普遍の命令に最善のかたちで従う方法を、ただ常識から考えたのでしょうか。マタイ28:19aで、イエスは弟子たちにこうおっしゃいました。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。」一度目の旅で、パウロとバルナバは多くのたましいをイエスの信仰へと勝ち取りました。この新しい信徒たちが成熟した弟子へと育まれるためには、教えがさらに必要です。これは常識であり、主の導きをあえて必要とすることではありませんでした。



第二次宣教旅行は、マルコと呼ばれるヨハネの一件で波乱のスタートとなりました。しかしその後は、パウロの一行が以前訪れた場所を訪ね、エルサレムの使徒会議の決議を知らせたり、弟子たちにさらなる教えを施したりしました。これも、ことさら主の導きを必要とはしませんでした。すべての民を弟子にするという大宣教命令を実行するのにまっとうなアプローチです。

しかし、一行が新天地を求めはじめたところ、神が具体的な指示を与えられたわけです。はじめに、パウロと一行は、聖霊によってアジア州での働きを見送らざるを得なくなりました。次に、ビティニア州に入るのも聖霊に阻まれました。残された道はただひとつ、西へと向かう道でした。そうしてトロアスに到着すると、神の摂理によってルカが一行に加わりました。ルカはルカによる福音書と使徒言行録の著者です。

トロアスで、主は、マケドニア人が助けを乞う幻をパウロにお見



せになりました。パウロがマケドニア州のフィリピの町に到着した際、イエスの福音を初めて信じた人はリディアでした。それで、幻のマケドニア人は女性だったという聖書学者もいますが、マケドニア人の幻はひとりの人というよりはその地域の人々の代表であったと理解するほうがよいでしょう。幻の人は、「わたしを助けて」ではなく、「わたしたちを助けてください」と言っているのですから。

私たちがもっとも必要とする助けは、罪の赦し、また、私たちをお造りになった創造主なる神との和解です。少し考えてみてください。ガンを長年患っていても、気づかないこともあります。その人は、医師による診断を聞いて初めて、ガンの摘出手術が必要だと知ります。同じように、多くの人は神との和解の必要性に気づいていません。私たちがイエスのことを伝えたと、その人々は良い知らせを受け入れる決心をする前に、悪い知らせを聞かなければならないのです。



人は皆罪を犯したことで、罪が死をもたらすことを、すべての人は知らなければなりません。そうして初めて、イエスの福音を認めることができるのです。ローマ6:23「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。」パウロのように、私たちクリスチャンもこのメッセージを失われた世の中に携えていきます。それは、人々がキリストにある新しい命に与るためです。コリント第二5:20「ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。」

パウロはフィリピにこの知らせをもたらしました。なかなか信じない人々の中で、リディアは喜んで信じました。主が彼女の心を開いてくださったからです。家族と一緒に洗礼を受けた後、リディアはパウロたち一行を家に泊まるよう招きました。使徒16:15「そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。」リディアの信仰と気前の良いおもてなしによって、イエスの福音がフィリピ以遠へと広がる道が開かれました。そしてついには、ヨーロッパ全土へと福音が広められていきます。



IV. 結び

イエスは良き羊飼いです。主の羊である私たちのために、ご自身の命をささげてくださいました。私たちはこのお方を羊飼いと呼びます。このお方がいつもともにいて、守り導いてくださるからです。私たちはこのお方を主とも呼びます。このお方が人のかたちをとって私たちのところに来てくださった創造主なる神であり、私たちが忠誠と従順をささげるにふさわしいお方だからです。このお方は主であるのに、主の御声をはっきり聞けない人が多いようです。



皆さん、今日の聖書箇所であることにお気づきでしょうか。パウロが具体的な指示を主から受けたのは、旅路をずいぶん進んでからのことでした。すべての民を弟子にするという普遍の命令に、パウロは常識を働かせて従っていました。イエスの霊や幻によって具体的な指示を受けたのは、その後のことです。

多くの人は、何もしないうちから主の具体的な導きが欲しいと願います。けれども、まず私たちが普遍の命令に従うかどうかを主は見えておられるのではないのでしょうか。具体的な指示はそれからです。主の御声を聞きたいと思いませんか。神のみこころを知りたいですか。それなら、主が与えられた一番大切な命令に従うよう努めることをお勧めします。みことばに書かれた掟に従う従順さを養っていくときに、主がさらに語ってくださるでしょう。

最後に、もっとも大切なふたつの命令を見ましょう。これらを守れば、主は私たちを神との和解に、そして、周囲の人々との和解に導いてくださいます。マタイ22:37-39「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』22:38 これが最も重要な第一の掟である。22:39 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」

祈りましょう。

V. 祈り